

中国における多様な民族主義を考える

——中華民族の言説とジェディディズムの成立過程を通じて——

小嶋祐輔

(愛知大学・院、日本学術振興会特別研究員)

はじめに

かつてスターリンが『マルクス主義と民族問題』の中で提起した「国家」形成と同時進行される「民族」の形成過程においては、「近代国民国家」の形成を目指す運動としての「民族主義」は、国家の樹立とともに消滅するかの如く見なされており、「一民族一国家」の原則に反する「民族主義」的主張は、分裂主義や反革命でしかなかった。このような解釈に基づけば、多「民族」国家の「民族」主義という問題においては、「民族」という語の前者と後者の用法に矛盾が生じることにもなる。しかし、その後「既存の国家内の下位集団であるエスニック集団が自己の文化的・社会的アイデンティティの確立を求め、政治的自治権の獲得・強化を目指す」運動としてのエスノ・ナショナリズムを対象とした研究や、そもそも「国民国家」と「多民族国家」は別物なのだという解釈(キムリッカ)、或いは nation の形成過程における「市民モデル」と「エスニック・モデル」の相違の指摘によって非西欧的「ネーション」としての「民族」の定義が試みられた(スミス)ことなどによって、国家と民族の一致という幻想はほとんど崩壊したと言える。

しかし中国においては、中華民族という言説を額面通り受け容れれば、少なくとも表面上は中華民族による国家という構図が成立する。ここにおいては、Chinese nation(或いは China nation)は「中国国民」ではなく「中華民族」として理解されねばならない。この立場からは中国は多民族国家ではなく、「中華民族」という単一の民族による国家であるとさえ言うことが可能である。1950年代、成立間もない共和国内において度々粛清の対象となった地方民族主義(或いは大漢民族主義)や、所謂東トルキスタン問題をめぐって現れる汎トルコ主義といった中国国内の「民族主義」の問題は、「国家と民族の根本利益」への脅威・挑戦として排斥される。果たして、中国という一つの国家においては多様な「民族主義」の存在は許容されないのだろうか。

民族から族群へ

中国の多様な「民族主義」を考えるうえでは、近年の中国国内の「少数民族」に対する定義の変化も重要な要素になると言える。プロレタリア革命期における漢族を「民族」と呼ぶのなら、同一の国家内において革命に参加するその他の集団も「民族」であるというかつての解釈は、「少数民族」が「民族」となるイデオロギー的根拠を提供していた。ここでは、「中華民族」とそれを構成する各「民族」とが(その定義において矛盾を抱えつつも)パラレルに存在していた。しかし改革開放後、被抑圧者が一様に「民族」として承認されプロレタリアー

トを中心とした革命的諸階級の連帯によって民主主義社会の形成に向かうとする「新民主主義」の理論はその役目を終え、「Chinese nation としての中華民族」を措定し、少数民族を「ethnic minorities としての少数民族群」として捉えようとする(寧騒ら)見解が広く議論され、民族(ネイション)と族群(エスニシティ)の区別は、政治に重きを置くか文化に重きを置くかである(納日碧力戈)とさえ言われた。

このような議論は、問題の政治的側面を弱めることによって、各「少数民族」の権利保障などの面で民族団結と国家統合に不利となる影響が現れるかもしれないという留保をつけられながらも、中国は一つの民族国家(a nation state)であると同時に一つの多民族的民族国家(a multi ethnic nation state)である(馬戎)という概念が提起されるに至っている。各「少数民族」が、中華民族と各民族集団(族群集団)への重層的な帰属意識をもち、それらの帰属意識は決して矛盾するものではないという一種の多元主義的見解も、このような国家に対する重層的な概念の設定から導き出されるのである。無論このような多元主義者の見解は、アイデンティティの多様性に着目するという点で、多文化(multi cultural)社会における相互承認(テイラー)の可能性を拡大させたことは事実であろう。

しかし、このような多元主義者たちによる「多極共存」(或いは「多極収差」という統合モデルが中国において適応されるためには、中国国内のエスニックな(族群的な)諸権利の要求等をエスノ・ナショナリズムの発現として捉え、そのうえで既存のイデオロギーによる普遍主義的支配や集権的中央政治機構による支配の正統性が再考を迫られているということが認識されなければならない。この点、馬戎が地方民族主義を ethno-nationalism とは訳さず族群に政治的権利や利益の要求は存在しないと考えたのは象徴的である。差異の承認だけでなく、そこから生じる異議申し立てを如何に吸収し、問題を解消するのかという点を多元主義者たちは往々にして置き去りにしがちである。

結局のところ、上述のようなアプローチは、なぜ今も汎トルコ民族主義者が現れるのか、なぜ「東突」問題はこうも根深いのか、そして彼らはどこから来たのかという問いに回答することができないのである。どこから来たのかという問いに対して、それを遡及して歴史的に検討することは一つの有効な手法であろう。現在の中華人民共和国の領域において、かつては二つの民族主義が存在していた。1933年11月12日、中華民国新疆省(現在の新疆ウイグル自治区)のカシガルにおいて、現地のトルコ系ムスリムによって「東トルキスタン・イスラーム共和国」の独立が宣言されたが、少なくともそこでは「国家」と「民族」の一致が明確に標榜されていた。無論ここで言う「民族」は、現在のウイグル族或いは「中華民族」とは異なるものである。この点について少し整理が必要であろう。

民族(ネイション)と民族主義(ナショナリズム)

アンダーソンは、社会における脱宗教のプロセスと印刷された言葉(印刷資本主義)の登場によって共同体を想像することが可能となり、その成員としての無名の個人が自己を規定し、お互いを認知することによってネイション成立の条件が整ったと分析した。またゲルナーは、近代社会はその維持のために必要なイデオロギーを生み出さねばならず、そのた

めに文化的な同質性を必須条件としていると見なし、支配的な文字文化への同化が失敗した場合、つまり特定の文化的特徴をもった集団を吸収できなかった場合には二つのナショナリズムが生まれ、二つのネイションが形成されると考えた。

ネイションとナショナリズムを近代の派生物と見る近代主義的解釈に対して、A・D・スマスはイデオロギーとして、或いは運動としてのナショナリズムという側面から考えればこれらの解釈は正しいと認める。しかしそれと同時にスマスは、我々が「ネイション」と呼んでいる単位や、「ナショナリズム」と呼んでいる感情や理念そのもの、或いはそれに著しく類似したものは近代以前にも見出すことができ、それらは文化的な象徴によって維持されていたとする原初主義的解釈の重要性も認めたい。ネイションやナショナリズムは過去からの継承性とかつての共同体(エトニ)のネイションへの変容・再編プロセスが重要であると見なしている。

中国における多様な民族主義(ナショナリズム)の問題として、中華民族多元一体構造論へと帰結する中華民族をめぐる言説と近代東トルキスタンにおける改革思想(Jādidism)を取り上げたのは、共同体の継承性や変容・再編のプロセスにおいて多くの類似性が見出せるのではないかという考えからである。しかし、その内部には決定的な違いが見られることも事実である。それゆえこの二つのナショナリズムは解決困難な対立を招いているのではないかとも考えられる。

かつての共同体

ここで対比される両者のかつての共同体においては、フェアバンクが中華帝国の統治理念として取り上げた「文化主義」が見出される。かつての共同体は「その言語の固有の神聖性について揺るぎない自信をもっており、誰をこの共同体の成員として認めるかについてもはっきりとした考えをもって」と述べるアンダーソンによれば、両者はアラビア語と漢字をよりどころとして古典的な共同体を想像していたのだと言う。この点についてはスマスも「言語の一致こそが文化的同質性に人々を駆り立てる」として賛同している。

規範としての漢字と礼教を用いた中華による夷狄に対する教化のプロセスは、「天下」というイデオロギーに基づく共同体を出現させた。「天下」観では、その実際の支配領域については有限性が自覚されていたが、形而上では教化のプロセスを通じた無限性が志向されていた。そしてこの共同体は朝貢或いは理藩院統治といったシステムに見られるように、「中華+夷」という二元的構造(西村・村田)を内包していた。後に費孝通も凝集の中心としての漢族を指定することによって、このような二元性を受け容れている。

一方「天下」と同様、イスラーム共同体としてのウンマもシャリーア(イスラーム法)が統治の法と見なされる一種の場としての「脱領土的」(大塚)な性格をもっていた。しかし東トルキスタンに居住するムスリムに対しては、イスラーム受容前の時代に「ウイグル人」がマニ教や仏教を信奉していたことや、少なくとも14世紀頃にはタリム盆地周辺のイスラーム・トルコ化がほぼ完成していたことなどからアラビア語に依拠した古典的宗教共同体への包摂について疑問が呈されるかもしれない。だが、ナショナリズムという問題から考える際には、

正則アラビア語を解するウラマーのクルアーン(およびハディース)解釈によって秩序付けられる各地域社会を結ぶムスリム共同体(ウンマ・イスラミーヤ)のネットワークに東トルキスタンが組み込まれていたことをひとまず強調しておきたい。また各地域社会が〇〇朝といった国家の形態をとる場合にも、究極的な理想が、神の下した啓典・真理を地上に正しく具現する一元的共同体——ムハンマドのウンマであったことは重要である。

いずれにしる「中華型」の古典的共同体と「イスラーム型」の古典的共同体が共に脱領土的で文化主義的傾向をもっていながらも、その構造において二元性の承認と一元性の志向という違いを内包していたことは、重要な意味をもっていたと思われる。

中華「民族」の創出

清末になると西欧に成立した領域的ネイションの拡大は、所謂ウェスタン・インパクトとして「天下」の縮小を迫り始めた。その結果、かつての共同体は、実体的な領域としての国土と「一元的な忠誠心」(村田)をもった成員たちによって形成される均質な国民によって構成される「近代的」なネイションへの再編が求められるようになった。

この再編プロセスにおいて特徴的なのは、かつての二元的構造をもった古典的共同体が、満漢のエスニックな対立を契機として王朝の正統性が崩壊したことにより、まず各個の(種族的な?)エスニックな共同体(漢、満、回、蒙、蔵)へと解体されたことである。そしてこのような解体された各エスニックな共同体を既存の領域継承の必要性から再統合しようと試みたのが、孫文の「五族共和」や蒋介石の「宗族論」といった同化融合論的な中華民族の言説であった。極めて単純化されたものではあるが、この解体(多元性の表面化)——統合(一元化への試み)という再編プロセスには、スミスが東方のネイション形成モデルにおいて特徴的であるとした「領域的ネイションの概念とエスニックなネイションの概念の錯綜」が見られる。

領域的ネイションの概念とエスニックなネイションの概念の完全な合一を目指すイデオロギーとしての中華民族ナショナリズムを、より一元的でより強固なものとするために創出されたのが費孝通による「中華民族多元一体論」だったのではないだろうか。

費は、彼が「自在的民族実体」と呼ぶ自然発生的な民族実体が数千年の歴史の中で形成されてきたとして、その起源が恐らくは新石器時代にまで遡れるとしている。その根拠として求められるのが、当時「中華の大地」で活動していた幾つかの集団の「多元性」である。このような費の観点に基づけば、「多元性」こそが現在にまで至る「中華民族」の持続的存在を可能にしたエスニックな象徴であったということになるだろうか。

費の「中華民族多元一体論」については、「多民族国家の現状を過去に投影して解釈する遠近法的逆立がみられ・・・中華ナショナリズムは現実の国家利益に奉仕する公的イデオロギーと言わざるをえない」(村田)との批判がある。ホブズボウムが「伝統」とは近代において「発明」された」と指摘するように、現状の起源を遠い過去に求めることは確かに「創出」されたイデオロギーであると呼べるかもしれない。しかし「多元性」という「中華民族」の象徴を「本質的」なものとして常に再生産しようという試みは、ある種の「復興主義」的な運動とし

ての性格を中華ナショナリズムに付与しているのではないだろうか。

東トルキスタンにおけるジェディッディズムの出現

ジェディッディズム(Jädidism)は、1884年にクリミア・タタール人のI・ガスプラルによって設立された「新方式」の学校 *usuli jädid*(方法の革新)に由来する「運動」である。この「運動」に対しては、「自民族の文化的再建によるムスリムとロシア人の互恵的な共同の道を提言することにあつた」(山内)、「クルアーンの中にその普及の正当性を求めたムスリム・モダニズム」(アディーブ)、「(ウイグル)文化啓蒙運動」(王柯)といった解釈がなされている。現在ではウイグル人研究者たちの間でも当地のトルコ系ムスリムを無知から救い、啓蒙した教育改革として高く評価されているが、無論公式にこれをウイグル・ナショナリズムなどとして論議することはない。

この「運動」が「新方式」の学校教育として展開されたことは、アンダーソンの述べた「印刷された言葉」の普及と深く関係している。ガスプラルが世俗的科目の導入をはじめとする教育改革と同時に「ボスフォラスから中国国境まで」理解可能な共通トルコ語の普及に努めたのは、自分たちの言葉で表現されたイスラーム・イデオロギーとそれを理解する新たな知識人を生み出すためであった。これを現状では(控えめな表現においても)「パン・トルコ主義的傾向が見られる」と見なす傾向が強い。しかし実際には、アラビア語に基づいた古典的宗教共同体が解体されるプロセスにおいて、その背後にあったエスニックな共同体としての「ナショナル・イスラーム」が表面化しつつあつたのではないか。このような見方に立てば、糾合的イデオロギーとしてのパン・トルコ主義というよりは、むしろ多元化のイデオロギーとして理解できると思われる。その引き金となつたのは、ここでもやはり西欧の領域的ネイションの拡大による当地の周縁化であり、またはオスマン帝国のスルタン・カリフ制崩壊の兆候であつた。

このような古典的共同体解体の帰結として表面化した各共同体は、なんらかの方法で自らの領域を決定する必要があつた(ちょうど「中華民族」が清朝の領土保全を目指したように)。東トルキスタンのムスリムは自らの領域を二つの方法で把握していた。一つはタリム盆地、タクラマカン或いはアルテ・シェヘル(六つの都市)、イエッテ・シェヘル(七つの都市)といった自分たちのエスニックな郷愁に基づく把握であり、もう一つは「中華型」共同体との相対化であつた。このような領域はウンマではなくウェテン(*wätän*)(アラビア語では *nation* の訳語にあたる)と呼ばれ、共同体を構成する成員たちにとって「我々の血と涙が捧げられる祖国」(メムティリ)として認識されるのである。しかし、ウェテンのような領域的ネイションの概念の登場を、ウンマという宗教共同体からの離別を図る世俗的なナショナリズムの発現として理解することはできない。

ムスリムたちによる古典的宗教共同体としてのウンマからネイションへの再編の手段は、彼らにとって最も身近なエスニックな象徴——イスラームに基づき行われた。いわゆる「イスラーム復興運動」である。後のイラン・イスラーム革命に多大な影響を与えたイデオログであるアリー・シャリーアティーは、ウンマを「共通の目的をもつた運動を基礎とした」

一元性を志向するものである定義した。厳格な一神教としてのタウヒード(神の唯一性)を実現していたムハンマドのウンマは、ムスリム・ナショナリストにとっての「中華民族における多元性」のごとき、本質主義的な解釈を可能にするエスニックな象徴であった。この点において「イスラーム復興運動」は「中華民族」創出のプロセスと共通した特質があるのではないだろうか。

東トルキスタンのムスリムによるジェディッディズムにおいても、「宗教と科学の一体化した」(din bilän pän birläştürülgän)教育改革が実施されたことや、「愛国主義運動、啓蒙運動、改良主義運動の視点から、広く実際にジェディッディズムの普及がなされ、シャリーアの解釈をクルアーンとハディースに照らして行った」(Hewir)ことなどから、イスラーム復興運動としてこれを理解することが可能である。ジェディッディズムは、領域的なネイションの概念としてのウェテンとエスニックなネイションの概念としてのウンマが合一するためのイデオロギーだったのである。そのため、遠い過去から持続的に存在すべきエスニックな象徴としてのムハンマドの「一元的」ウンマおよびタウヒードの実現に反する神秘主義(スーフィズム)——多神教の要素をもった二元的信仰と見なされる——およびその教団組織としてのタリーカが批判にさらされることとなる。

つまり、ここにおいても「中華民族」という言説の登場のプロセスに見られたような「領域的なネイションの概念とエスニックなネイションの概念の錯綜」が見られるわけであるが、一方で、ユルゲンスマイヤーが説くような「世俗的ナショナリズム」と「宗教的ナショナリズム」の区分は、イスラームに代表される宗教復興現象を正しく捉えているとは思えない。そもそも、「世俗」という概念は非常に広い意味をもっており、例えば現在のトルコにおけるイスラームを「世俗的なイスラーム」と呼ぶことに多くの人が違和感を覚えまいであろう。また、ジェディッディズムの教育改革の側面を見て、それを世俗的でないということも難しい。

おわりに

中華民族をめぐる言説と東トルキスタンにおけるジェディッディズムをナショナリズムという視点から比較検討した意図は、現在の中国の民族間関係が事実上、中心としての漢族と周縁としての少数民族という二元的構図が現れているにも関わらず、均質且つ平等な国民としての中華民族が存在するため、漢族と各少数民族の間がそれぞれ全く等質な関係にあると見られており、それが時として所謂民族問題への対処において必要以上のコストや、或いは全くの無視といった状況を招いているのではないかというところにあった。実際同じムスリムであっても、回族があくまで祖国を「中国」と見なしていたこと(松本の紹介する「二元忠誠論」)や回族の教育改革が(漢字を用いていたため)中国の国民教育の一部となった事実と、東トルキスタンのムスリムのジェディッディズムは大きく異なっている。

確かに、ジェディッディズムを推進したムスリム・ナショナリストたちは、「近代」の知識人たちであり、マザール信仰のようなスーフィズムも依然として残っている。よって全ての問題がジェディッディズムの一元性への志向と中華民族多元一体論における多元性の

承認という二つのナショナリズムの対立によって生じるとは言えないであろう。だがそれでも尚、東トルキスタン・ムスリムをめぐる民族問題、つまり新疆ウイグル自治区の民族問題に対しては、エスノ・ナショナリズムという視点から個別の対応がなされるべきではなかろうか。

最後に、一般的に「ウイグル」と関連して語られことの多いこの問題において、「ウイグル」という呼称を用いずに東トルキスタン・ムスリムと呼んだのは、所謂彼らの族源問題や民族史再構築の動きなどについて、別途論じる必要があると感じたためである。

主な参考文献

- ・愛知大学現代中国学会編『中国 21』vol.19 特集「内モンゴルはいま—民族区域自治の素顔—(風媒社、2004年) (加々美光行 論説「中国の民族政策をめぐる新思考」)
- ・アリー・シャリーアティー著、黒田寿郎序論、櫻井秀子訳・解説『イスラーム再構築の思想 新たな社会へのまなざし』(大村書店、1997年)
- ・石川一雄『エスノナショナリズムと政治統合』(有信堂、1994年)
- ・王柯『東トルキスタン共和国研究—中国のイスラームと民族問題』(東京大学出版会、1995)
- ・大石真一郎「カシュガルにおけるジャディード運動—ムサー・バヨフ家と新方式教育」(『東洋学報 第78巻』1996年)
- ・大塚和夫『近代・イスラームの人類学』(東京大学出版会、2000年)
- ・加々美光行『知られざる祈り・中国の民族問題』(新評論、1992年)
- ・スミス・アントニー・D 著、巢山靖司・高城和義他訳『ネーションとエスニシティ・歴史社会学的考察』(名古屋大学出版会、1999年)
- ・中村廣治郎『イスラームと近代 現代の宗教13』(岩波書店、1997年)
- ・西村成雄編『現代中国の構造変動3 ナショナリズム—歴史からの接近』(東京大学出版会、2000年)(西村成雄 序章「二〇世紀史からみた中国ナショナリズムの二重性」 村田雄二郎 第一章「二〇世紀システムとしての中国ナショナリズム」 松本ますみ 第三章「中国イスラーム新文化運動とナショナル・アイデンティティ」)
- ・蓮實重彦、山内昌之編『いま、なぜ民族か』(東京大学出版会、1994年)
- ・ベネディクト・アンダーソン著 白石さや・白石隆訳『増補 想像の共同体 ナショナリズムの起源と流行』(NTT出版、1997年)
- ・山内昌之『スルタンガリエフの夢』(東京大学出版会 1986年) 『神軍 緑軍 赤軍 ソ連社会主義とイスラーム』(筑摩書房 1988年)
- ・ユルゲンスマイヤー・M・K 著、阿部美哉訳『ナショナリズムの世俗性と宗教性』(玉川大学出版部、1995年)
- ・費孝通等著『中華民族多元一体格局』(中央民族学院出版社、1989年)
- ・馬戎編著『民族社会学—社会学的族群関係研究』(北京大学出版社、2004年)
- ・賽福鼎『賽福鼎回憶録』(華夏出版社、1993年)

- Adeeb Khalid, *The Politics of Muslim Cultural Reform, Jadidism in Central Asia*, University of California Press, 1998
- Hewir Tömür, *Abdurqadir Damulla Häqqidä Qissä.*, Shinjang yashlar-ösmürlär nāshriyati, 1996
- Mirāhmät Seyit, Yalqun Rozi, *Māmtili Äpändi*, Shinjang uniwersiteti nāshriyati, 1997